

55

民主主義考（その一）

中学生の教科書であるからして、その表現は分かりやすく、可能な限り平易な言葉で「民主主義」を説明している。民主主義の生い立ちから、それをどうやって育てていくかと云ったところまで踏み込んでいる。もっとも教科書であろうとすることで、逆に白黒をはっきりさせてきている部分も否めない。終結したばかりの太平洋戦争を反省するところに立ち、「民主主義」を普及させようという意図から、勧善懲悪的な表現になるのは致し方ない。

その点は割り引いたとしても、この教科書は見事に「民主主義」を説明している。民主主義の何たるかを余

この本には、話し合いで決めることが「民主主義」だなんて一行も書いていない。多数決とその前の議論の意味が明確に書かれている。民主主義の基本的精神は、「各人が自分自身の人格を尊重し、自らが正しいと考えるところの信念に忠実である」という精神である。いわば個人の尊重である。議論も、この個人の尊重という考えの上に成り立つものである。そして「政治の面からだけ見ていたのでは、民主主義を本当に理解することはできない」ともいう。ここから各種選択の自由、言論の自由、思想信条の自由などが導き出される。

もつと、次の選挙で当選するため、あるいは大臣の椅子が早く回ってくるように金で身売った人には、「自らが正しいと考えるところの信念に忠実」であり続ける自由はないが。

その機会をどれだけ活用して、各人の才能をどこまで向上させ、發揮させて行くかは、人々それぞれの努力と、もって生まれた天分とによって大きく左右される。その結果として、人々の才能と実力に応じた社会的地位の相違ができる。それは当然のことである。だから民主主義は人間の平等を重んずるからといって、人々が社会的に全く同じ待遇を受けるのだと思つたら、大きな間違ひである。そして「民主主義的な正しい世の中は、人間のうちに応じた適正な配分の上にうち立てられなければならない」と、「結果平等」を明確に否定している。もともと民主主義は、個人の尊重の下に、優れた者が優遇される社会である。これは私も「救済の原則」という言葉で機会あることに話してきたことである。優れるに至つた努力に対して敬意をはらい評価しなければ、社会は発展しない。だが、それだけでは社会はぎすぎすしたものになる。だから優れるに至る過程で、多くの人から受けた恩恵を、今度は未だ優れざる人に対して「民主主義の精神」を損ねない範囲で返済する。これが救済の原則である。もちろん結果を保証するものではない。

しかしながら、今日この国では、間違ひなく「平等」といえば「結果」として「平等」であるという考えが根底にある。人に「追い付く」という意識はあつても、横に並んだところでOKだ。親の子にたいする「不憫」という気持ちも、それ自身を否

ソフトウェア開発のコンサルティングをやっている最中困るのは、企業における「評価制度」が結果平等に根付いていることである。勉強して苦労して新しいやり方を身に付けても、社内規定や時には組合との労務協定が障害になって、「評価のしよつがない」という場面に遭遇する。

一方、従業員自身の考えも「結果平等」が染み着いていて、同期に入社

(ラ・ブリュイエール、フランスのモラリスト)

ある本を読んでいて、この言葉を目にしたときはシヨックだった。今日、我が中に於ける父親の存在ととも出来る。

国の家庭の中に於ける父親の存在は、非常に希薄なものになっているのではないか。最近でこそ残業の減少で、家に帰るのが早くなっている父親もいるようだが、それでも一週間に何時間、子供と顔を合わせて話しをするだろうか。

とも出来る。
 島田伸介率いる“チーム・シンスケ”は、今年最後の八耐（八時間耐久レース）を戦った。残念ながらマシントラブルで途中リタイアとなつて、最後の完走はならなかったが、彼らは一・年間夢を追ってきた。

子供が朝起きたときには、父親はもう出かけていていないし、夜だつて殆ど顔を見ることはない。日曜日もたまに家にいても疲れて横になつてゐる。これでは“家庭も省みない、こんな大人には成りたくない”という気持ちを抱いてもおかしくない。

父親は子供に夢を与えなければならぬ。

メーカークのワークス・チームと違つて、彼らは仕事の合間をぬつて一年かけて準備してくる。夏休みに開催されるため、一・二年間“家族の夏休み”を奪つたが、父親達の夢に打ち込む姿は、子供たちに大切なものを教えた。彼らには間違いなく父親が宝物なのである。だが、こんな父親は一体何人いるだろうか。

した者が氣になつて仕方がない。本當は自分の能力に応じて、役割を果たせばいいのに、小さいときから「平等」とは、「同じに扱われ」ることとして育つてきたため、同じ扱でないことがそのまま「落伍者」になつてしまふ。これも、民主主義を正しく教えてこなかつた結果と言えよう。

「新党への移行の大事な時期に、マインスになるような発言をしないように書記長に気をつけてもらえ」とは、野坂官房長官の言葉である。■

らない。与え方は色々あるだろうが、忙しくて顔を合わせる時間が少なくて、たとえば父親自身が夢を実現しようとしている姿で伝えることも出来る。

島田伸介率いる“チーム・シンスケ”は、今年最後の八耐（八時間耐久レース）を戦った。残念ながらマシントラブルで途中リタイアとなつて、最後の完走はならなかったが、彼らは一。年間夢を追ってきた。メーカーのワークス・チームと違つて、彼らは仕事の合間をぬつて一年かけて準備してくる。夏休みに開催されるため、一。年間“家族の夏休み”を奪つたが、父親達の夢に打ち込む姿は、子供たちに大切なものを教えた。彼らには間違いなく父親が宝物なのである。だが、こんな父親は一体何人いるだろうか。